

リファレンスライン

「リファレンスライン」のトレーニングへようこそ。

付属の練習ワークブックをダウンロードして参照し、実際にTableauを操作してみてください。

リファレンスラインは、その名のとおり、基準点をビューに追加します。ビューで特定のエリアや分布を表すためにリファレンスバンドやリファレンスボックスも追加でき、同じグラフに複数のリファレンスラインを追加することもできます。

リファレンスラインの追加

リファレンスラインは簡単にビューに追加できます。[アナリティクス]タブには、ドラッグ&ドロップで選択できるオプション一覧が表示されます。それでは、表全体の[リファレンスライン]を追加してみましょう。ビューでマークをいくつか選択すると、リファレンスラインが一時的に更新され、そのマークについてのリファレンスラインが表示されます。

リファレンスラインのオプション

先ほどのラインを元に戻し、今度は[ペインごと]を選択します。自動的に設定される内容で問題がなければ、このダイアログを閉じますが、設定できる項目は多数あります。[アナリティクス]ペインには、上部のこのことと同じオプションを選択できます。ここでは[リファレンスライン]を使い、オプションを変更するとどのように変化するかを見ていきます。

まず[スコープ]です。

- [スコープ]は[ペインごと]に設定されていますが、[表全体]または[セルごと]も選択できます。
- [表全体]をクリックすると、カテゴリーごとに1本ずつあった3種類の平均ラインが、表全体の平均を表す1本のラインに変わります。

次に、ラインそのものを調節します。利益の[中央値]のラインを追加しましょう。

- [値]では、ラインの基準となるメジャーを選択できます。ここでは、ビューに「売上」も「利益」もあるので、そのいずれかを選択します。「利益」を選択してみましょう。
- ラインの既定の集計は[平均]ですが、すべてのオプションを使用できます。ここでは[中央値]を選択します。
- 次は[ラベル]です。このオプションでは、ラインのラベルとして表示する内容を設定します。
 - [なし]はラベルなしです。
 - [値]を選択すると、メジャーの集計値、つまり「利益」の実際の中央値が表示されます。
 - [計算]を選択すると、メジャーの集計方法が表示されるので、ここでは「利益の中央値」となります。
 - [カスタム]では、表示したいラベルを入力できます。
 - 隣にある矢印で、挿入できるフィールドを選択できます。
 - ここでは、「<値>: <フィールド名>の<計算>」などと指定します。

間違えて[適用]の代わりに[OK]をクリックしてしまいました。もう一度ダイアログボックスに戻りましょう。リファレンスライン自体を右クリックし(こうすればマークをクリックする心配がありません)、[編集]を選択します。このとき右クリックで[書式設定]を選択すれば、ラインの幅、色、スタイルを設定できます。線についていくつか設定を変更できますが、ここでは点線に変更してみましょう。

リファレンスラインの書式設定

- 定数線は、[アナリティクス]ペインから直接指定できます。ここでは。
 - ここで、値の入力を求められます。500,000と入力しましょう。

リファレンスラインを右クリックすると書式設定のオプションを使用できますが、[書式設定] > [リファレンスライン]を選択して設定することもできます。これでわかるように、設定できる多くのオプションがあります。

軸を右クリックすると、リファレンスラインの編集、削除、追加のオプションがあり、リファレンスラインのフィールドがビューのメインメジャーでない場合には、フィールドを切り替えることもできます。これは[表示形式]で作成したビューを変更するときに便利です。

ライン、バンド、分布、箱ヒゲ図

[アナリティクス]ペインには[ライン]、[バンド]、[分布帯]、[箱ヒゲ図]のオプションがあります。

- [ライン]は、1本で1つの定数または計算値を表します。
- [バンド]は、マークの背景で、定数または計算値に挟まれたエリアに影を付けます。
- [分布帯]はグラデーションのある影を付けられるので、ブレットグラフなどで効果的です。
- [箱ヒゲ図]では、四分位数とヒゲが表示されます。

リファレンスバンド

リファレンスバンドの設定では、これをペインに追加します。リファレンスラインと異なるのは、上限と下限に2つの値を指定する必要があることだけです。既定では[最小値]と[最大値]になっていますが、[中央値]や[平均]にも設定できます。ここでは[平均]のラベルを外します。

- これで、2つのメジャーで中心傾向が大きく異なるのはどの部分かが判明しました。また、データに歪み(ひずみ)がある可能性も出てきました。

分布帯

分布帯にも、他のリファレンスと同様、[表全体]、[ペインごと]、[セルごと]のオプションがあります。

違いがあるのは、[計算]からです。分布帯のオプションとレイアウトの制御方法については、オンラインヘルプで「[リファレンス ライン、リファレンス バンド、およびリファレンス ボックス](#)」の項を参照してください。

分布帯はブレットグラフを作成するときに使用することも知っておくといいいでしょう。ブレットグラフは[表示形式]から選択でき、リファレンスラインと分布が組み合わせられます。

箱ヒゲ図

箱ヒゲ図は明快です。統計的な分布を示す際に一般的に使われている手法です。

- ヒゲを四分位数範囲の1.5倍にするか、最大と最小にするかを設定できます。
- 細かいビジュアルの設定、箱ヒゲの範囲内のデータの非表示、枠線とヒゲの書式設定などのオプションもあります。
 - [グラス]スタイルや線の幅の変更ができます。
- 箱ヒゲ図は[表示形式]で選択できます。
 - 箱ヒゲ図で使いたいフィールドを選択し、[表示形式]で箱ヒゲ図を使用します。設定は、リファレンスラインと同じように変更できます。

ドロップライン

Tableauで使えるもう1つのオプションがドロップラインです。軸の値を表すという点ではリファレンスラインと似ていますが、ドロップラインはビューのマークに関連付けられています。

- ビューを右クリックして[ドロップライン] > [ドロップラインの表示]を選択し、ドロップラインを有効にしてみましょう。
- これで、ポイントまたはマークを選択すると、軸上の値の点までラインがドロップするようになります。
- ドロップラインを編集するには、再度ビューを右クリックして[ドロップライン] > [ドロップラインの編集]を選択します。
 - ドロップラインは、常に表示するか、マークを選択したときにのみ表示するかを選択できます。
 - 多数のマークがある場合、ドロップラインを常に表示するとビューが見にくくなることがあります。
 - どちらか一方の軸または両軸にラインをドロップするか、
 - 値にラベルを表示するかどうかを選択できます。
- これで、マークをクリックしたときにY軸までラベル付きのドロップラインが引かれるようになりました。

ドロップラインは、棒グラフや折れ線グラフなど他のタイプのグラフでも使用できます。

最後に

リファレンスラインのトレーニングをご視聴いただき、ありがとうございます。Tableau Desktopの使用法について、引き続きオンデマンドトレーニングビデオをご覧ください。